

研究報告) 多様性ある「ユニバーサルきもの着付け」の取り組み —視覚障がい者のための「きもの」着付け—

Universal Kimono Dressing with Diversity – Kimono for the Visually Impaired –

山野愛子ジェーン¹⁾ 佐藤美奈子¹⁾ 青木和子¹⁾ 山下牧子²⁾

抄録

多様性ある「ユニバーサルきもの着付け」への取り組みとして、車いす利用者のための「きもの」着付けへの実践研究は、山野美容芸術短期大学の発信から福祉社会の中でも認知されることとなった。しかし、障がい者は車いす利用者だけではない。そこで今回は、視覚障がい者にも無理なく「きもの」着付けが可能であるかを実践研究した。障がい者福祉においても、2003年辺りからさまざまな支援法が施行され、障がい者が自分らしく自立し、主体的な日常生活が営める環境が徐々に整備され、主体的に選択できるしくみとなり、「自己選択」「自己決定」が推進されてきた。地域社会に生活する多様な人々が理解し合い、平等に地域に参加し、同じように自立した生活を送ろうというノーマライゼーションの理念の下、ここでは装い「きもの」から共同を考察する。

人は情報収集の約80%を視覚に頼っているが、とくに盲の人は光が眼に入らないため聴覚、触覚、嗅覚などから情報収集をしている。本研究ではここに注目し、主に聴覚と触覚で「きもの」を装う手法を検証した。その結果、「きもの」は、その容(かたち)が一定であるがゆえに、視覚障がいの人でも自分で「きもの」を着ることが可能であることがわかったので、ここに報告する。

キーワード：きもの 多様性 視覚障がい者 ユニバーサル ダイバーシティ 美容福祉

I. 緒言

障がい者の衣服については幅広い事例と研究がなされているが、きものに特化した装いの研究はほぼない。著者らはこれまで美容福祉の理念を支える「美道」の哲学を遵守し、「人をいつもいきいきと美しく輝かせたい」という信念の下、日本を代表する伝統文化「着物」に焦点を置き、冠婚葬祭、通過儀礼の装いに着眼してきた。そして山野美容芸術短期大学の「山野研究紀要」において、すべての「きもの」が車いす利用者に対し無理なく着装可能であることを証明してきた。きものの特異性はその大きさにあるため、「着用するプロセスの工夫で誰もが自分できものを着用できるのでないか」という仮説の下で検証し、きものは立位姿勢で着用するだけでなく、座位の状態でも着用可能であるという結果を得た。

美容福祉学会等での研究発表を経て、「山野研究紀要」に投稿した5本の論文は、文献リストに列記したので参照されたい。

今回は視覚障がい、視力や視野等の視機能に障がい

があり、見るのが不自由または不可能になっている状態の視覚障がい者が、「きもの」を自分で着用することができるかについて検証した。

視覚とは、見る感覚作用を指し、視機能になんらかの変調が起こり、治療が及ばずに永続的に低下・消失している状態を視覚障がいという。視覚障がいは、一般に視力の程度によって「盲」¹⁾と「弱視」²⁾に分けられる。ここでは「盲」と「弱視」の状態を含む範囲を視覚障がいの対象とし、きものを自分で着ることを想定した着付けプロセスを確認した。著者等は着付師として日常にきもの着付けの手法を指導している、著者等が通例行っている着付けは、着用者が自分の身体に沿って身体の部位を目安に着用していく手法である。自分の身体に自分が触れて自分の身体をガイドラインとして着用するため、途中の工程で目視を要する場面はほぼない。よってきものを着用するプロセスは著者等の手法と同様に置き実施した。

実践にあたり、今回は視覚障がいを想定し、晴眼者が目隠しをして視野を狭めた(目をつむった=目隠

1) YAMANO Aiko Jane, SATO Minako, AOKI Kazuko

山野美容芸術短期大学

連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

2) YAMASHITA Makiko

国際美容協会

連絡先:〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-13-8

山野代々木ビル6F

¹⁾ 盲：視力が0またはそれに近い視力障がい資格による日常生活が困難なもの

²⁾ 弱視：両眼の強制視力が0.3未満で資格による社会生活は可能であるが非常に不自由であるもの

し) 状態で着付けを行った。ただし、着付けの手法が万人に通じるものかを確認するため、着付け経験がまったくないモデルを起用し、着付師が着付けの手順を丁寧に口頭で誘導する方法とした。その結果、着用者が自分できものを着て帯を結ぶことにおいて視覚的要素はほぼ必要でないことがわかった。また聴覚、触覚に注力することが有効ということも確認できた。さらに、声がけや周りの環境、視覚障がいの方の立位姿勢、身体の可動域、など新たな課題にも気づくことができた。

このような実践研究報告は少ない。自分できものを着用できることは、自分の暮らし方の選択肢を増やし生活のQOLを向上させることにつながるのではないか。車いす利用者のためのきもの着付け実践研究から、自分には無理だとあきらめてしまう人の気持ちが前向きに変化する事例も確認してきた。『美容芸術論』³に記述されている、「人は誰でも美しくありたい」と願う気持ちに、引き続ききものから考察していく。

II. きもの着付けの実践

1. 背景と目的

同様の研究事例はほぼないが、過去の記録としては美道の提唱者・山野愛子氏が目隠しをして着物着付けを行っている動画が挙げられる。山野氏は着物着付けを専門に行う山野流着装の初代宗家で、現在は2代目の山野愛子ジェーンが引き継いでいる。この山野流は、開設当初から「畳半畳の面積内で、まったく光のない状態でも着付け可能」を提唱してきた。そして「美道」に基づく技術を指導する中で「心の目」という言葉をもって、個人の感覚を研ぎ澄ますことの大切さを重ねて説いてきた。したがって、着付けにおいても、山野流では鏡を見ずに自分の身体をなぞるプロセスで装う方法を継承している。一方、衣服の着用者は、視覚に障がいがある方でも青年以上の年齢では洋服の着替えはご自身でおこなう方がほとんどであるという。そこで、きもの着付けも練習をすれば自分で着用することができるだろうと考えた。

目的の一つは視覚障がい者の生活・QOLの向上にある。視覚に障がいのある方もおしゃれに多くの興味があることがわかったので、日本の慣例である通過儀礼や社交の場でも「きもの」を着用するという選択肢

が増えれば、コミュニケーションのきっかけとなり社会交流の一助につながると考える。二つ目はきもの普及と多様性あるきもの特性の検証にある。誰にでもきものを身近に感じてもらうことで、きものを着て外出や、お茶会への参加など、どのような方も差異のないきものの装いを共有することで、「ユニバーサルきもの着付け」の可能性を広げ、きもの共生社会の実現を目指していきたい。

2. きもの着付けの実践方法について

山野流着付けのテキストを基に、一つひとつのプロセスを口頭で伝え着用者の実践を導く方法で実施モデルYさんを着用者とする。Yさんは晴眼者で立位の状態も長く保持できる。事前の準備と説明は口頭者が行い、全体のプロセスを理解していただく。

Yさんは着付けの経験はない。

きもの着付けから仕上がりまでは、大きく分けて3つのカテゴリーに括られる。

- ① 着付けの準備から下着の準備
- ② きもの着付け
- ③ 帯結び

今回の指導方法について、口頭が主な手段となるため、筆者等が視覚障がい者の同行援護の学びに使用した『視覚障害支援ハンドブック』⁴の接し方より、以下に注意して行った。他の留意点に触れて確認すること、手指をものさしとして使うことがある。

着付けの指導方法

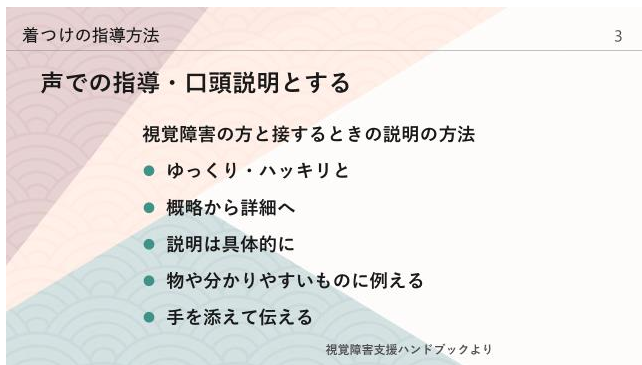
- ・ ゆっくり、ハッキリと
聞き取りやすいように陽に、ゆっくり・ハッキリと話す
- ・ 概略から詳細へ
大まかに説明してから、必要があれば詳細を伝える
- ・ 説明は具体的に
「あれ」「それ」「こっち」などのあいまいな言葉ではわからないため、「右」「左」「前」「後ろ」「2歩ぐらい」「北」など具体的に説明する。
- ・ 物やわかりやすいものにとえる
食事や移動の際には、時計の文字盤に例えて説明をするとわかりやすい。

⁴ 「視覚障害支援ハンドブック」
国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局
函館視力障害センター
<http://www.rehab.go.jp/hakodate/files/handbook.pdf>
(2024.1.25)

³ 『美容芸術論:世界で初めて公開する美道の研究』
山野愛子著 IN 通信社,1991.1

- ・手を添えて伝える

いすやテーブル・スイッチの位置など、場所によっては手を添えて触ってもらいながら説明するとよい



触って確認

今回は折り紙できものの形を作り、事前学習の教材として試みた。たとえば、背縫いや脇縫いなどは、山折りにする。袖口や身八ツ口は開ける。共衿は重ねる、などである。実際の着物の形のミニチュアを作り、これを「教材」として使用したことは、効果があった。

測る基準

長さの対象を物差しで測り何センチといった解釈を用いず、あまり大きな誤差の出ない人の身体の一部、たとえば手幅いくつとか指1本分の長さとか指二節といった人の手の感覚を頼りに着付けを完成させている。

3. きものの着付けから仕上がりまで概略

本研究では、Yさんにアイマスクを使用し、視覚がない状態できものを着ていくことができるかを検証。着付けプロセスは大きく分けて3つのプロセスとする。

① 長襦袢までの着付け

ワンタッチ半襟⁵を使用。補正はタオルを折り、紐を縫いつけたものを事前に準備（触覚部位は鎖骨、胸元、腰後ろ）。視覚がない状態でも口頭説明のみで長襦袢に見立てた装着まで行うことができた。

② きものの着付け

きものを羽織り衿止めするところから、おはしよりを整えて伊達締めをすところまでのプロセスを約30分で行うことができた。

③ 帯結び

今回は、半幅帯を使用し、一文字結びに仕上げる。

約20分で行うことができた。

所見としては、ワンタッチ半襟を使用することで、時間短縮が可能となり、おおよそ3K（簡単・苦しくない・キレイ）のユニバーサルのキーワードをクリアできたものの、きものの部位について事前の学習や帯の仕上がりの形は事前に形に触れてもらい、でき上がりのイメージを持たせることが必要だった。



4. 着付けの詳細

4-① 着付けプロセス 小紋の着付け

配置：体のそばへ、きものや帯・小物を配置する。着付け前に、声による説明のほか、実際に触っていただき、どこに何があるか、配置を覚えていただく。

○衿止め（きものを羽織りワンタッチ半襟と着物の衿を合わせて止めること。触覚部位は喉くぼみ、両胸）事前に小物の配置場所も伝えていたのでスムーズに行えた。



○裾線を決める（きものの長さを自分の身長に合わせて調節し紐を腰にあてて結び丈を整える動作。触覚部位は右足の甲、腰骨、臍、尻）

声での説明で腰ひもまで行う。きものが足の甲の上へ触れる感覚や、きものがかかるとに触れる感覚を大事にする。裾に意識を向けるため、今回は小さな鈴をつけて感覚を補助した。

○胸元を整える（上半身のきものを胸元で合わせ整え紐をあてて結ぶ動作。触覚部位は胸膨らみの下、背）ご自分の指先の感覚を大事に、ワンタッチ半襟をガイドラインに左右対称に合わせる。半襟の量の確認・き

⁵ 多様に利用可能な簡易的半襟。令和元年特許済。

もの共衿を折る分量なども指先、指の節などで確認する。鏡を見なくても着られる山野流の自装の指導をそのまま十分に理解して進むことができた。

○おはしよりの始末（2本の紐で腰と胸元を押さえるとき、ものの余りがお腹周りが出るため、その余りをスムーズに均して整える動作。触覚部位は腹、腰回り）

指と手のひらの感覚を大事に、布がボコボコしないようにスムーズに整える所作を行った。布のひずみは手のひらで、おはしよりの長さは指で計るなど、それぞれを手で読み取ることができた。



おおよそ約 30 分できものの着付けが完成。

4-② 帯結び 半幅帯使用 一文字

主に浴衣に使用する半幅帯を使用して、ちょっとした外出の際の帯結び「一文字」を実践。通常の場合、親指と中指をひと幅として手幅一つ、手幅二つという要領で長さを指示するが、今回も同様に行った。プロセスは次のとおり

- ①羽にひだをたたむ
- ②手とたれで結ぶ
- ③羽の形を整える
帯を後ろに回す

普段の指導と同じ方法で問題なく仕上がった。

○手先を計り、胴に 2 回巻く（触覚部位はみぞおち、胸の位置、脇の下）

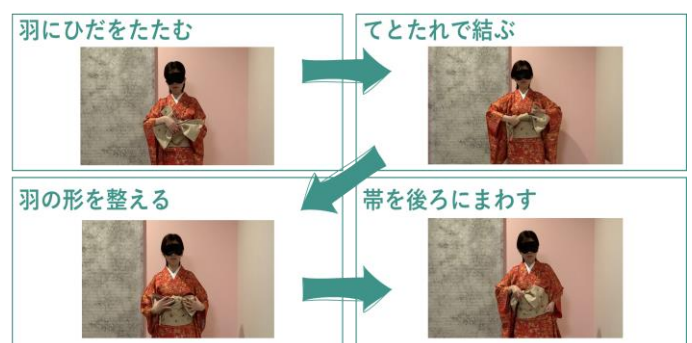
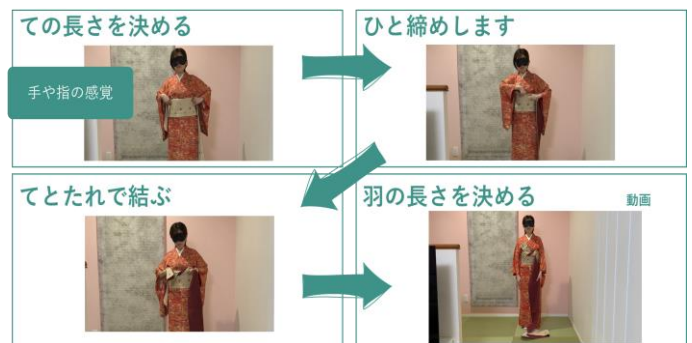
手や指の感覚を大事に声での説明に慣れてきてスムーズに進む。2 回巻いてひと結びし、残りの長さを手幅で確認する。

○羽の長さを計る（触覚部位は身体前胴幅）

たれ先で羽の長さを決めるところは、声掛けにしたがい羽もとから羽先を手繰り寄せ、自分の胴を計り、羽を巻くまで別段問題はなかった。

○羽を作る

手を使い、羽の大きさを測り、手の感覚で羽の左右を同じ長さに整えることができた。



○帯板を入れる

帯板を入れた後に、帯の一巻目と二巻目がずれることがあったが、ご自身で触ってもらうとずれているのがすぐわかり、直すことができた。

見て行わない状態でも、手や指の感覚でまるで見て行っているかのように、美しい動きで仕上げていく姿が印象的だった。



小紋の着付け半幅帯使用一文字結びのでき上がり

5. 結果と考察

視覚障がいを持つ方が自装で着付けを行う場合、「声での指導・口頭説明」を適切に行うことで十分理解し自分で着用できる可能性が高いことがわかった。自分で着用する場合、着付けをする方の「感覚」がとても重要であること、特に手や指の感覚、裾が足の甲に触れる感覚などが装いの課程に直接関わりを持ち、美的な仕上りを創り出すことができた。

ポイントとなる「口頭による誘導」については誘導する側が必ず同じことを同じように言うことが必須となるが、山野流では着付けトークとして文言が確立しているため、同じテキストを共有し学び合うことも可能である。着付けにかかる「時間」を考えると、どうしても健常者の方より長くかかってしまうが、健常者でも最初は1時間程度かけてこれらの工程を行うため、慣れてくることで時間も短縮できると考える。

次回は事前学習を行った場合、若干の知識を得た後で何が改善されるかどうかを確認したい。また裾の決

め方に課題があり、きもの素材により紬など張りのあるものは布の動く音から各部を感知できるかどうかについても確認したい。点字の導入やエンボス加工による教材を提供できれば、きもの形、名称の確認など触って理解することも有効になるだろう。

今後さらに改善を重ね、きものダイバーシティスクールの目標「誰もが自由に自分できものを楽しむこと」が実現できるように実践を積み重ねたい。

最後に、本研究にそもそも重要な点は「きもの」はその形がほとんどすべて一定である上に、着方までもがほぼ決まっているということだ。また、帯もその種類に違いがあるものの、種類別でみると長さは決まっておき、結び方にも一定のルールがある。つまり、手の感覚だけで「きもの」が着られるということである。日本人が何百年もの間、「きもの」のデザインを変えずにつないできた意味は、まさに多様性あふれる衣装であることを証明している。こうした実践を通し「きもの」はひとつの完成されたSDGsの衣服であることを広く伝えていきたい。



健常者より時間がかかる

改善策・提案

○事前に情報を得ておくといよい

- ①点字のテキスト作成 ⇒ 先にプロセスを理解
- ②エンボスの教材作成 ⇒ 名称を覚える



利益相反の有無

なし

参考文献

<論文>

- 1) 山野愛子ジェーン, 青木和子, 佐藤美奈子, 志村裕子, 山下牧子, 西川奈実著 「車いす利用者のための着付け・自装」プロセスの実践的研究ー2001年から2012年の「車いす利用者のための着付け・他装」研究等を経てー「山野研究紀要」第28・29号 p.1-6 2019.3
- 2) 山野愛子ジェーン, 青木和子, 渡辺聡子, 中根正子, 山下牧子著 車椅子利用者のための和装婚礼衣装 「山野研究紀要」第12号 p.23-32 2004 (美容福祉学会等での研究発表を経て紀要に投稿)
- 3) 山野愛子ジェーン, 青木和子, 渡辺聡子, 近藤正子, 山下牧子著 車イス利用者のための紋服 「山野研究紀要」第14号 p.1-1411 2006
- 4) 山野愛子ジェーン, 青木和子, 渡辺聡子, 近藤正子, 山下牧子, 西川奈実著 車イス利用者のための七五三 「山野研究紀要」第15号 p.51-55 2007
- 5) 山野愛子ジェーン, 青木和子, 佐藤美奈子, 西川奈実著 車イス利用者のための成人式「山野研究紀要」第20号 p.17-22 2012
- 6) 雙田珠己, 鳴海妙子著 運動機能に障害のある人が着脱時に感じる衣服の問題点と既製服の修正に対する意識 「日本家政学会誌」Vol55 No.12 987-974 (2004)

<図書>

- 1) 松井奈美編著「同行援護ハンドブックー視覚障害者の外出を安全支援するために」第2版(2015)株式会社日本医療企画
- 2) 山野愛子著 「美道® 山野愛子ー美容世界一周八十三日」(1958) 学校法人山野学苑
- 3) 山野愛子著「美容芸術論ー世界で初めて公開する美道の研究」(1991) IN 通信社
- 4) 学校法人山野学苑(山野愛子ジェーン, 青木和子) 「四訂 美容福祉概論ーその知識と実践技術」第3章 8 和装・車いす利用者への着つけ p.178-188 (2016) 中央法規出版
- 5) 山野愛子著 「私の五十年」(1975) 文唱堂
- 6) 樽見弘紀・服部篤子編著 「新・公共経営論ー事例から学ぶ市民社会のカタチ」(2020) ミネルヴァ書房
- 7) ウィル・シュッツ著 「ヒューマン・エレメント・アプローチ」(2014) 白桃書房
- 8) 船津徹著 「世界標準の自己肯定感の育て方」(2020) KADOKAWA

<参考 URL>

- 1) 日本視覚障害者団体連合 <http://nichimou.org> (2024.1.20)
- 2) 文部科学省 共生社会の形成 <https://www.mext.go.jp> (2024.1.20)
- 3) 日本学生支援機構(JASSO) <https://www.jasso.go.jp> (2024.1.20)
- 4) 厚生労働省障害保健福祉部 <https://www.mhlw.go.jp> (2024.1.20)

(英文タイトル)

Universal Kimono Dressing with Diversity

ーKimono for the Visually Impairedー

提出日: 2024/1/20